

最優秀賞
折口信夫賞

地域民話研究部門（団体）

日本の心、地域の文化を伝えるために

群馬・利根沼田学校組合立利根商業高等学校
パソコン部

（川端雄哉、千木良優斗、後藤岳、白井佑美、生方優奈）

応募の動機

私たちは、地域の民話や文化などの研究調査を行う中で、この活動をもっと多くの人に知ってもらいたいと思っていました。そうしている中で、顧問の先生からこの「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストのことを伺い、このコンテストに応募することで、多くの方に活動内容を伝えることができると思ったからです。

研究レポート内容紹介・今後の課題

現在の日本では、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けた様々な活動を行っています。そして、観光産業は地域経済の活性化につながると考えられています。そのため、多くの外国人の方にみなかみ町を知っていただき、来訪していただきたいと考え、みなかみ町役場観光商工課の方にみなかみ町の特徴や観光資源について教えていただきました。その中で、観光商工課の方の話の中にあつた文化的要素から、「歴史・文化」の活用に注目し、日本人に馴染みのある「民話・昔話」を利用することによって、子どもから大人まで幅広い年代に楽しんでいただけたらと考えてました。

私たちは、みなかみ町に伝わる民話や昔話を調べるため、猿ヶ京ホテル大女将の持谷靖子さんにご協力いただきました。みなかみ町に伝わる民話は、昔話や神話、伝説、自然で起きた出来事や、動物に関するもの、村話や噂話など500以上あることがわかりました。これらの民話を英訳し、日本や地域を紹介することで、私たちにもインバウンド観光での地域貢献ができるだろうと考えてました。

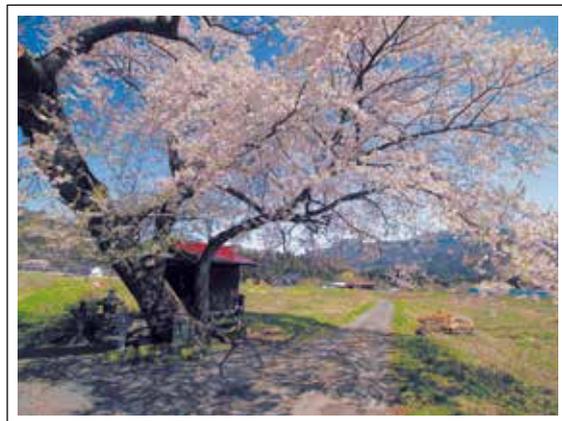
絵本の内容は、「外国人には物語の結末がはっきりしているものや伝説などが好まれる」と持谷さんからアドバイスを受け、絵本のコンセプトを「みなかみ町の不思議話」とし、各部員で選択していきました。次に、選んだ民話を外国人向けに英訳する作業に取りかかりましたが、英訳にどの部員も苦労しました。それは、方言や擬音語をどのように英訳するのか悩んだためでした。そのため、英語科の先生とALTの先生にご協力いただきながら各自完成させることができました。イラストは私たちのオリジナルで作成し、個性豊かな挿絵を作ることができました。

そして、絵本を完成させ、みなかみ町のホテルなどに置いていただきました。しかし、「絵本はすぐになくなりました」とホテルから連絡を受けたことや、直接外国人観光客に配布した際に、外国人の方はスマートフォンやタブレットを片手にお話をされていたことから、絵本がなくても見られるようにしようと考え、電子書籍を作成していきました。

今後の課題は、プロモーション活動が不足しているため、みなかみ町内の観光施設に電子書籍のQRコードやURLが掲示してもらえるように、みなかみ町観光商工課やみなかみ町観光協会と協力してPR活動に取り組んでいきたいと思っています。また、インターネットを活用した口コミ効果を利用し、多くの外国人に私たちの絵本やみなかみ町に興味を抱いていただき、広めてもらいそれをきっかけに来訪してもらえるようにしていきたいと考えています。



ALTの先生と入力した英文の確認作業



実際に存在する地蔵桜（一宮桜）

優秀賞

地域民話研究部門（団体）

佐野の舟橋・佐野の渡しの伝説

群馬・高崎商科大学附属高等学校
社会部進学女子2年
(高橋紀香、三堀歩海)

応募の動機

私たちは、顧問の先生からこのコンテストがある事を知り、地元の事について調べていた所、親が「佐野の舟橋」の民話の地を通るたびにこの話をしてくれた事を思い出して、「佐野の舟橋」の民話を調べてみました。するとこの話は奈良・平安時代に有名だったという事を知り、他の人にも伝えたいと思いました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

「佐野」という地名は、天武天皇十（西暦 681）年に建てられた山ノ上碑の文中に「佐野三家（さぬのみやけ）」と記されていた。佐野三家は大和朝廷の直轄地で、朝廷の官吏が住んでいた。また、神亀三（726）年建立の金井沢碑には「下賛郷（しもさぬごう）」とある。この二つの碑文から奈良・平安時代は、烏川を挟む広域を佐野と呼んでいたといわれている。古くは「さぬ」と言われ、中世以降は「さの」と読まれている。この事から佐野は高崎市内でも最古であると同時に、群馬県内でも最古であり、全国的に見ても古い地名である。この地は、謡曲『舟橋』『鉢木』『定家』のゆかりの地であると同時に、半径 200 m 圏内にこの 3 つにまつわる史跡がある。

『佐野の船橋（省略）』

遙か昔、烏川を挟んで東の佐野に朝日長者、西の片岡に、夕日長者と呼ばれる長者がいた。二人の長者は、互いに力を競い合っていて、隙があれば相手を滅ぼそうと狙っていたという。その朝日長者には那美という美しい娘が、夕日長者には小次郎という凛々しい若者がいた。

ある夏の夕暮れの事。烏川に架かる舟橋のたもとで、那美が侍女と月見草を摘んでいると、そこへ小次郎が、馬で通りかかった。那美を一目見た小次郎はその美しさに心を奪われ、那美もまた、小次郎の若衆ぶりに頬を染めた。

翌日から二人は月見草の開く夕方になると、橋のたもとでこっそりと会うようになった。しかし、その逢瀬はいつまでも隠し通せる訳もなく、暫くして長者達に知られてしまった。

「朝日長者の娘などに、会ってはならん！」「夕日長者の息子なんぞに娘はやれん！」と長者たちの怒りは凄まじく、二度と会わないようにと、那美も小次郎もそれぞれの屋敷に閉じ込められてしまった。しかし二人の思いは募るばかりだった。

ある夜、必死の思いで屋敷をぬけだした那美は、烏川の舟橋を、小次郎のいる館を目指して走った。ちょうど懐かしい舟橋の中程まで来た時、突然那美の姿が「あーっ！」と闇を切り裂く悲鳴と共に、烏川の流れの中に消えた。二人が会えないようにと長者達が使用人に言いつけて、橋板を何枚か外させておいたのだ。

そこへ、那美に会いたくて、密かに屋敷をぬけ出した小次郎がやってきた。橋のたもとで、那美の悲鳴を聞いた小次郎は、声のした方へ夢中で駆けた。そして、外されている橋板に気がついた。「那美っ、那美っ！」足元の闇に向かって、小次郎は声のかぎりに叫んだ。しかし、帰ってくるのはどうどうと流れる水の音だけだった。そして、那美の死を悟った小次郎は、那美の後を追って、激しい流れの中に身を沈めたという。

その後、烏川の急流に那美の後を追いかけて心を遂げた小次郎と那美の物語は、「恋の舟橋」として世間に広がった。その世代の若い男女ばかりでなく、歌詠みたちの悲しいモチーフともなり、烏川に掛けられた舟橋を訪れるものが多くなった。

しかし、舟橋に夜な夜な怪異が現れた。舟橋を渡る若者や娘達は、幽霊に出逢って腰を抜かして、言うようにして逃げ帰ったのだ。「あれは心中した若者たちの怨恨だろう」と童の口の端にまでのぼり、遠近の人々も恐れて舟橋はいつの間にか往來が途絶えてしまった。

これを知ったある旅の高僧が、「それは村でもお困りでしょう」と経を誦じねんごろに供養を行い、舟橋のエノキの根本に石の観音像を建てた。このエノキは舟橋の舟を繋ぐ大木であったが、それから不思議に怪異は起こらなくなり、水も干しあがり、一条の川原となって、舟橋は元のように人通りも増して来た。それからずっと後の文政 10 年（1827 年）、高崎宿あら町延養寺の住職、良翁（りょうおう）が、『かみつけの佐野の舟橋とりはなし 親はさくれど吾（わ）はさかるがへ』という万葉集の古歌を板碑に刻んで、高崎、藤岡間の街道の傍に建立したものが、今に残されている。

私たちは、群馬県内および他県（全国）にこれと似たような民話があるかどうか調べてみたが、残念ながらもなかった。しかし、この話の結末は、「長雨で水かさが増した川の流れが二人を呑んだ。」「長者たちが板を何枚かはらずし、それを知らない那美が川に落ちて、後から来た小次郎が那美の悲鳴を聞いて川に身を投げた。」「朝日の長者が家の者に命じ、小次郎の通ってくる舟橋の板を取りはずしたため小次郎が川に落ち、那美は何日待っても小次郎が姿を現さない悲しみから、川に身を投じた。」など、資料によって異なっている。このように、佐野の舟橋の民話は時代の流れと共に、話の内容が変化していったのだと私たちは考える。

また、万葉集や和歌の数を見れば分かるように奈良・平安時代に「佐野」の地域は関心の深い地域であったということがわかった。

以上の事から「佐野の舟橋」の民話は昔の文化人の間では有名だったこともわかる。

今回は現地でのインタビューをしていなかったため、今後は、インタビューをふまえて詳しくまとめられるようにしたい。



佐野の舟橋歌碑



かつてここに舟橋があったとされる現在の佐野橋



佐野橋周辺図

優秀賞

地域民話研究部門（団体）

下小鳥町の首塚伝承

群馬・高崎商科大学附属高等学校
文芸部

（吉野初夏、高木里緒、田作聖羅、堀田悠季乃、石井綺穂、長谷川由菜）

応募の動機

学校の近くにある首塚について、小さい頃から興味があり、それを部活動内で調査してみようと思ったのがコンテストに応募したきっかけです。フィールドワークを通じ、文献からでは読むことができなかった事実をまとめ上げることができました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

群馬県高崎市下小鳥町には「首塚」と呼ばれる石碑があります。

元和二年（1616）秋、高崎藩士検見役謀二人、下小鳥に来て検見をしたが、度を越した厳しさにたえかねて、村民は大いにこれを恨んだ。なかでも血気さかな若者数十人は、役人の帰途を擁してこれを殺してしまった。藩主松平丹波守はこれを聞いて激怒し、翌年正月四日、この部落に出兵し老若男女のことごとくをみなごろしにしたという。（引用）

下小鳥村民が大量虐殺された慰霊碑とされています。しかしこの碑の通りの歴史的事件は明確には記載されておらず、実際起こった事件であるかが疑われています。伝承として残ってはいるが確かな記録として残ってはいないというのが、この碑の特徴です。そこで近隣住民に聞き込みを行いこの事件を調べてみました。

一つは「生き残りがいた」説についてです。文献ではなぜこの事件が伝わっているのかははっきりしない部分がありました。しかし聞き込みをすると、どの方の話でも生き残った人物が紹介されました。そしてなぜこの事件が伝承としてしか伝わっていないかとして、書物に記録を残し町民の生き残りを世に知らしめてしまうことの危険性を考えていました。だから口伝えで言い伝えられたのだろうという結論でした。

もう一つが「安中藩」についてです。聞き込みでは安中藩は村民を助ける側の藩であるのに対して、文献では高崎藩に加勢するという真逆の立場でした。村民を助ける白装束の馬が登場しますが、それが安中藩なのかは当時の情勢から考えると否定的な方も多くいました。けれど、聞き込みから「小天狗」という謎の存在（正体不明の忍者）が語られました。噂の域を出ない存在だから記録として残っていないのか、はたまた正体を知られないほど上手く存在が隠されていたのかわかりません。「小天狗」という存在が藩同士を繋ぐ役割、もしくは藩同士を仲違いさせる役割を果たすのでないかと考えました。もしかすると安中藩の使者が小天狗であり、高崎藩と繋がりを持っていたのではないかと考える方もいました。

今回は下小鳥町の話を中心として考えましたが、他の村や町にもどのような首塚伝承があります。他の地域と比較することでよりこの事件をまとめ上げるのが今後の課題と考えます。



首塚の慰霊碑



首塚について話をさせていただきました

民話「川上へ流れた仁王さま」の世界

岐阜県立益田清風高等学校
地域研究

（奥田俊輝、河合聖哉、熊澤歩倫、佐藤翔、杉山慎悟、信田結伍、松井悠祐、山下樹林、石丸譲一、伊藤海斗、神田わこ、熊崎真次、西村未羽、野中千乃、日置大勢、二村優衣、船坂映未、松下莉子、蓑島宏奈）

応募の動機

私たち益田清風高校総合学科では、「地域研究」という授業で、地元である下呂市の伝統や特徴について学んでいます。その授業で、下呂市の民話について調べる機会があり、興味を持って調査をしました。調査を進める中で、下呂市には各地域にその地域の伝統を表す民話があることが分かりました。そして、その民話の面白さや下呂市の魅力を県外の人にも知ってもらいたいと思い、応募しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私たちは、下呂市の民話について調べるなかで「川上へ流れた仁王さま」という話に興味を持ちました。そこで、民話に出てくる地域や出来事、自然について調査を行うことにしました。そして、授業時間や夏休みを利用して、実際に現地に足を運び、自分たちの目で確認をして分かったことや感じたことをまとめました。

A：民話の舞台

- ・民話の舞台である萩原町や宮田、小坂といった地域で民話に登場する場所を分かりやすく地図にまとめました。
- ・自分たちで地図を作成することで、民話に登場する場所の位置関係がよく分かりました。

B：民話の分析

① 藤ヶ森観音

- ・民話に登場する玉龍寺があったとされる藤ヶ森観音の現地調査を行い、昔そこが玉龍寺であったことが分かりました。
- ・藤ヶ森には「大藤」という大きな杉の木があり、その木が藤ヶ森の由来となったことも分かりました。

② 三木氏の桜洞城

- ・民話の中にある飛驒の国であった戦いを調べると、三木自綱という武将が萩原町内にある桜洞に城を構えていたことが分かりました。
- ・戦国時代の萩原町でも多くの戦いがあったことが分かりました。

③ 藤ヶ森観音近くの益田川

- ・仁王さまが投げ込まれたとされる益田川の様子を見てみると、流れが激しくて、とても川上の方へさかのぼっていくとは思いませんでした。仁王さまが流れに逆らって、川上へ行ったとき、村の人たちはとても驚いたのだらうと思いました。

④ 小坂町周辺

- ・現地調査の結果、小坂町周辺には仁王さまの絵が描かれた看板があったり、小太郎という名前の使われたお店があったり、民話と町が深く関わっていることが分かりました。

⑤ 長谷寺

- ・長谷寺には、今もなお、流れてきた仁王さまがまつられていることが分かり、驚きました。
- ・怪力を手に入れようと大相撲の「横綱千代の山」などの力士たちが参拝に訪れたことも分かりました。

C：力持ち小太郎火まつり

- ・小坂町で毎年行われる力持ち小太郎火まつりに参加し、まつりがどのようなものか調べました。
- ・力持ち小太郎の「力布」も登場し、小坂の人たちの祭りに対する熱い思いが伝わってきて、とても感動しました。

調査を通じて、下呂市には地域と関係の深い民話がたくさんあることが分かりました。しかし、下呂市民でも民話のことを知らない人は多いと思います。昔から大切に受け継がれてきた民話が途絶えることが無いよう次の世代にどう伝えていくかが今後の課題だと思います。私たちにできることはないか、しっかりと考えていきたいです。



長谷寺の小太郎ゆかりの「伝説の石」



力持ち小太郎火まつりの広告



民話に登場した「仁王さま」

最優秀賞

地域民話研究部門（個人）

川との死闘～与三と人柱観音像にこめられた思い～

愛知県立杏和高等学校 2年
坂東 壮一郎

応募の動機

学校の先生の勧めもあり夏休みに身近にある民話について研究してみようと思いました。調べていくと地元の近くに流れている大きな川（木曾川）に人柱伝説「与三」があることがわかりました。自分の地元になんな話があったということを全く知らなかったので、「これを調べてみたい！」という衝動にかられて研究を始めました。

研究レポート内容紹介

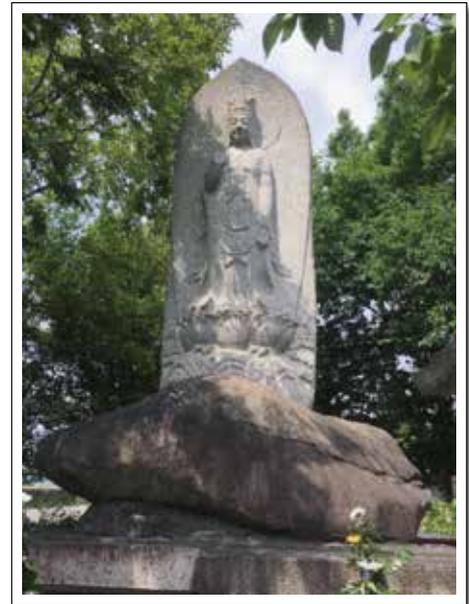
まずは川にある人柱伝説「与三」の民話の話の内容について調べました。そこで民話「与三」が一つの内容ではなく少しずつ内容が異なったものがいくつもあることがわかりました。そこからすべての話の共通点や異なっている点などをまとめてすべてを比較していきました。そうすると大まかに2つの結末があることに気が付きました。

その結果からなぜ一つの話の結末が大きく分かれてしまったのかを自分なりに考察していきました。様々な考察をしてみました。僕一人で考えていくと偏ってしまうのでこの人柱伝説に詳しい人達にも話を聞きに行きました。そこで話を聞いていく中で貴重な話や体験もさせて頂きました。

当初、与三は村人に落とされてしまったのではないのかと思っていましたが、「昔の人は自己犠牲の精神が強かった」と聞いて自ら進んで人柱になったという話もあり得ないことではないと思う自分も出てきました。

与三についてもっと知るために民話の舞台となっている人柱観音像を訪ねるとともに供養祭などについても調べました。与三の菩提寺の住職さんの話を聞き、現地に足を踏み入れることで、与三が地域の人々からどれほど大切にされていたのを知ることができました。またかつての川底や川沿いを歩くことでこの地が洪水との戦いの場所であったことも実感することができました。

今回の論文を通して、自分の人生の中で忘れることのない体験を沢山することができ、精神面でも人見知りを克服することができ、周りの人に助けられて生きていることにも気づかされ、多くものを得ることができました。そして民話はただの昔話ではなく大切な歴史で現代でも生きていることを知る事ができました。



人柱観音像



一宮市尾西歴史民俗資料館の学芸員さんに話を聞く

今後の課題

今回調べて行く中で人柱の与三を供養するために年に3つの行事があることを知ることができましたが、今回の調査期間内では参加することができなかったので、来年はできるだけ参加し研究を深めていきたいと思いました。今回の論文で民俗学やフィールドワークをすることの楽しさを知ることができたので、今後も取り組んでいきたいと強く感じました。

東京・町田市における妖怪伝説

東京・和光高等学校 3年
木原愛理

応募の動機

私は、家族旅行で岩手県遠野市の「とおの物語の館」へ行き、遠野の昔話を語り部から聞きました。遠野の昔話には、私の全く知らない話もありましたが、知っているものと同じ話もありました。そこで昔話はその土地独自に語り継がれているものと、日本国内どこでも共通に語り継がれているものがあるのではないかと思います。もし、そうであるなら、私が住んでいる町田市にはどんな昔話が残っているのだろうと興味がわき、最も関心のある妖怪を題材としたお話に絞って調べることにしました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私は家族旅行をきっかけに、自分が住んでいる町田市にも妖怪の話が残されているのか知りたくなりました。また、妖怪の話が残っているとすれば、私が初めて耳にするような町田市で独自に語り継がれている特有の話と、よく知られた全国規模で語り継がれている話に分類できるだろうと考えました。そして分類していく過程で、同じ土地に特有の話と全国的な話の2種類が存在する理由がつかめるのではないかと期待し、研究テーマとすることにしました。

研究は、まず町田市の民話が収録されている本から妖怪に関するものを抜き出すことから始めました。そしてその中から、町田市に多く伝わっているキツネの話と、共通のキーワードをもつ二つの池の大蛇伝説について調べることに決めました。調査の際には、寺の住職など古くからその土地に住んでいる方や、本の編集者や池の管理事務所、市立博物館の学芸員さんなどに聞いて回りました。聞き取りで採集できた話をまとめ、その裏付けを古い地図や資料、史実から調べ、自分が考察した結論につなげていきました。

この研究を通して、たくさんの方が自分の住む地域に伝わる話を大事にしていることを知りました。そしてこれまで存在すら知らなかった町田市の民話は、私達が後世に語り継ぐべきものであると思いました。

今後の課題は三つあります。一つ目は、昔話の分類方法として『知っているか、知らないか』といった個人の主観的なカテゴリズ以外の分類方法を見つけることです。二つ目は、町田の妖怪についての考察が、他の地域でも同様に言うことができるのかということの研究することです。三つ目は、自分達の地域の昔話を残していくために活動していくことです。

私はこれからも研究を深め、この地域に生まれ、育った者として、郷土の民話を残していくことに微力ながら尽力していきたいです。



狐火が数十年前にも見られたという並木周辺。今は住宅地が山を切り拓いている。



築田寺の池。大蛇が池を通過して八王子の柚木の長池と行き来していたと言われている。



薬師池公園内の桜の木。昭和初期にも木の上で日光浴をしている蛇の姿が見られている。今は木になって人々を見守っているという。

優秀賞

地域民話研究部門（個人）

チンチン山考

愛知県立時習館高等学校 2年
仲川晴斐

応募の動機

当時の事情から口に出すのも憚られ、わずかな関係者にのみ伝承されたが、その伝承さえも時の流れにより忘れ去られてしまった史跡に偶々巡り合い、新たに参加した歴史部で何か功績を残したいと思いました。そんな時学校掲示板にて見つけたコンテストの応募要項。偶然が重なり必然となりました。

研究レポート内容紹介

愛知県豊橋市杉山地区にあるチンチン山（山ではなく塚）と呼ばれる史跡は、戦国時代長篠の戦いで織田・徳川連合軍に敗れた武田氏の残党（武田氏、山本氏）が逃れて来てそこに住み着き、戦いで死んでいった一族を弔うために建立した塚であると伝わっています。

長篠の戦い後、織田・徳川の武田氏残党狩りは熾烈を極め、僧籍に在るものまでことごとく誅殺しました。しかし杉山地区に逃れた武田氏残党はその熾烈な試練に耐え忍び、今日現在まで脈々と子々孫々にその血を繋ぎ永らえてきました。

そこで、チンチン山近辺に在住する子孫でさえ誰の系譜に繋がる者であったのかがわからなくなった現在、長篠の戦以後武田一族に名を連ねる者を一人一人しらみつぶしに捜してチンチン山を築いた武田氏の残党とは誰であったのかを明らかにしていこうと考えました。

私がまず考えたのが、チンチン山に逃れてきた武田氏、山本氏は熾烈な残党狩りからは見向きもされない程家中での身分が低い者ではなかったのか？または血の繋がりの薄い者達ではなかったかということです。そして彼らが杉山地区（敵の支配地）で有利に生きてゆくために地元民に自分たちの本当の身分を偽り、尊い血の流れる者であるとだまして武田、山本姓を名乗ったのではないかと考えました。

次に長篠の戦い及び残党狩りにおいて、首実検され確実に死が証明された者以外に長篠の戦以後詳細不明の者、他の武将の家臣となった者がいないかどうかを調べ上げ、可能性のある者をすべて洗い出してみました。武田姓は甲斐源氏の血を引く尊き血筋ゆえ、武田を名乗ることのできる人物を考えて行けば自ずとその人物は判明します。その結果として一番可能性のある者は信玄の同腹弟であり、信玄に容姿がそっくりなため信玄亡き後その影武者として北条氏等を欺き続けた信廉の嫡男信澄ではないかという結論に達しました。長篠の戦いが起こった1575年に信澄は16歳。元服し初陣してもおかしくない年齢です。多分初陣し、一族の勇猛な部下（この御付の者が山本姓か？）が逐一付き添い、父親のそば近くに控えていたと思われれます。しかし戦いが不利になり、負け戦となって退却する時、本軍と離れ離れとなり南に逃れ、杉山地区に隠遁したのではないのでしょうか？結果として信澄が確定ではなくそうではあるまいか？程度の結果になってしまい残念で仕方ありません。



チンチン山五輪塔



鎮沈山三界萬霊供養塔

今後の課題

今回個人でコンテストに応募し、栄誉ある賞をいただきました。しかし調査にかける時間、私自身の知識・考察不足であることは否めないものがあり、今後歴史部の全部員の力を借りて来年はもっと事実に取り込んだ内容に仕上げたいと思っています。

応募の動機

私の地元である愛知県豊川市には、日本三大稲荷の一つとされる豊川稲荷があり、狐に関連した昔話がたくさんあります。

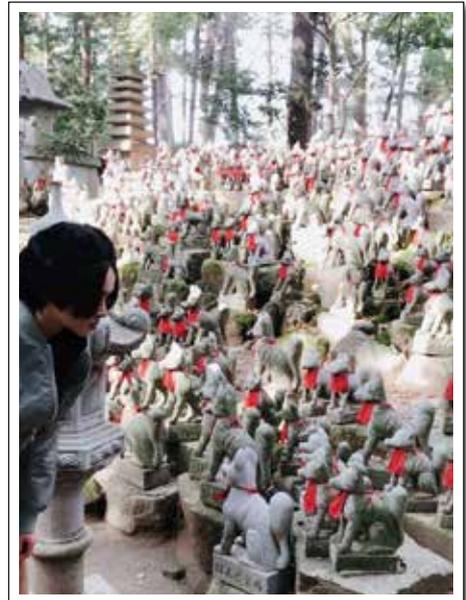
学校の夏休み課題として取り組むことになったこのコンテストをきっかけに改めて調べてみました。その中で、題材となった昔話に出会い、内容の面白さに魅せられたことから、地元の昔話を後生に伝承していくためにも、研究への意欲がわき、応募しました。

研究レポート内容紹介

「女ぎつねのしかえし」という昔話は、現在の豊川市大崎町にある快泉院というお寺が舞台です。快泉院の和尚様は、「綿ぼうが」（毎年秋の取り入れ時に家を回り、少しずつ綿や米などを寄付してもらうこと）の途中で昼寝をしている女狐を見つけ、首にかけていたほら貝を女狐の耳元で力いっぱい吹き鳴らすといういたずらをします。そのいたずらで女狐は和尚様に仕返しをしようとたくらみます。日が暮れて和尚様が帰る途中、女狐は恐ろしい顔を持つ巨大な化け物に化けて、和尚様を追いかけてまわすという仕返しをするというストーリーです。この昔話の面白さは、登場人物の意外な行動と狐のイメージの多様性にあります。和尚様というと堅実で真面目なイメージがありますが、軽はずみにいたずらをするという思わぬ一面を見せたということに対して、私たち高校生がそのときの気分でよくしてしまう「ノリ」という部分に重なるところがあり、面白いなと思いました。

女狐には、メスの狐という意味以外に、化けて人を騙すというイメージがあります。人を騙す悪賢い女性を罵った言い方をするとときに江戸時代から使われるようになったそうです。この昔話に登場する女狐の行いにも重なります。その一方で、狐は大切なことを教えてくれる崇拝すべき対象としても知られています。昔話の女狐も仕返しをすることで、「和尚様がそんな行いをする、人は和尚様を尊敬しなくなりますよ」という教えを示したとも考えられます。

現在も豊川稲荷の一番奥には、1000体以上の狐像がずらりとならんだ霊狐塚があります。よく見ると狐像は、一体一体表情が違います。そんな霊狐塚では、狐たちのまなざしが独特な雰囲気を生み、不思議な力を感じさせてくれます。狐は商売繁盛の神であり、さらに霊狐塚にある岩が金運のパワースポットとして有名であることから、私たちに富をもたらすありがたい存在となっています。地元では、狐は良いイメージとして根付いていると私は感じます。



霊狐塚



快泉院

今後の課題

豊川市には、「女ぎつねのしかえし」以外にも狐に関する昔話があります。今後は、他の狐に関する昔話や、豊川稲荷に関する昔話の研究をし、地元に残る昔話をより深く知ってもらうために多くの人に語り継いでいきたいと思います。

愛知県弥富市「おみよしの松」

愛知県立杏和高等学校 2年
蓑島千東

応募の動機

「大学で歴史をやりたいなら、この夏休みに地元のことを調べてみたら」と担任の先生に声をかけられた。休みを利用して挑戦してみようと思い、自分の住んでいる弥富にある「おみよしの松」について調べてみた。

研究レポート内容紹介

研究は以下の手順で行った。

- 1 おみよしの松の昔話を調べる。
- 2 おみよしの松について調べる。
- 3 およしの松の昔話の由来を調べる。
- 4 繋がり深い天王祭を見に行くと共にそれとの関係を考えて。

研究を通し感じたことは以下の通りだ。弥富の土地は常に洪水の戦いの土地である。常に自然の力にさらされるこの土地で新田の完成や堤防の完成は念願のことであった。それを記念して植えられた松。その時、偶然、神として津島神社からお神葎船が漂着したのは何よりも喜びだったんだろう。その松は、そこにいる人をいつまでもいつまでも見守るシンボルとして存在することになる。だからこそ「おみよしの松」という名がついた。だからこそ、昔話の中でも、津島神社の神の化身である切られた木の子孫が、生え替わりいつまでもいつまでも見守ることになっているという話になっているのではないかと感じた。

おみよしの松は、以前弥富中学校内にあったが、移転後は、スポーツ公園にそびえ立ち誰も見ることができる。一方移転した新しい弥富中学校の土地にもみよしの松の子孫が植えられている。先輩方が数十年にわたって「おみよしの松」に見守られたように、私もこの子孫の松に見守られて3年間を過ごした。今後も後輩たちを見守ることになる。その歴史の繋がりの素晴らしさを今回の研究で認識することができた。

今後の課題

このおみよしの松について調べる作業に入ったが、夏休みに学校祭の実行委員の仕事やクラス企画の作成に追われてあまり多くの時間を使うことができなかつた。次はおみよしの松と天王祭との関係と詳しく調べると共にみよし船がついたほかの地域も調べたいと思った。さらには弥富といえば伊勢湾台風がある。私達が住んでいる地域は時代を経ても洪水と戦う地域である。私の祖母が具体的に体験しているので聞いてみたい話だと強く感じた。



おみよしの松



おみよしの松の子孫



地域民話研究部門選評

國學院大學教授 花部 英雄

■総評

「地域民話研究部門」に応募されたすべての作品に目を通し、審査を終えたところで、今年度の応募者および次年度の応募者のために、改めてこの部門を審査する側の、意図とねらいについて明らかにしておきたい。最初に、「民話研究」では何をやればいいのか。次に、どのようにやればいいのかということについて述べる。

まず何を研究すればいいのかということであるが、今回の団体と個人の部における最優秀賞の、それぞれの講評を併せて参考にしてもらいたい。まず「団体の部」の最優秀賞は、群馬県の民話を英訳した「ミニ絵本」を作り、外国人の観光客に提供し楽しんでもらうという活動である。これは民話を創造的に生かし活用していくものである。一方「個人の部」の最優秀賞は、地域に伝わる「人柱伝説」を取り上げ、伝説がどのようにして形成されてきたかを、資料の収集や聞き書きをもとに、地域の歴史や自然環境を含めて究明しようとしたものである。いわば一つの民話を選び、多く材料を集め、問題点を追究したものである。「民話研究」には以上のように、既にある民話の活用を考える立場と、民話の発生や意義を追究する立場との両極において、それぞれ自分のテーマを見つけることである。

次に、「民話研究」をどのように行えばいいのかについて述べる。まず特定の民話を選び、その類似の資料を集める。すなわち書物や記録、現地調査や関係者・関係施設等への取材を通して集める。そうして集めた材料から問題点や課題を見つけるために、よく吟味する。材料集めも材料さばきも短時間で処理しない。あれこれ模索し試行錯誤を繰り返すことによって、研究の方向性がおのずと定まってくる。

ここでぜひとも注意しておきたいことがある。それは、インターネットを用いた安易な方法による作品作りである。ネットをきっかけとして利用するのはいいが、それに頼り切らずに、あらゆる手段や方法を用いて資料の収集および分析を行う。ネットで民話や写真を選び、それに近い解説を探して、コピーペーストして完了といった安易な方法はやめた方がいい。それが、授業の課題作成であっても、短時間の切り貼りによる作成は無意味である。なぜなら、「無」から「有」を生み出す創造的営みは、最終的には自分の能力を磨く

ことにつながるのである。それがその後の自分の人生で大事なことからである。

今回の応募作品の中にも、自分でかけがえのない作品を作ろうという意欲の低い作品が多い。作品の優劣は、ひとえにモチベーションの如何にかかっている。「労を惜しんで安きに流れてはいけない」ということを、ぜひとも肝に銘じておきたい。

審査は次のような基準で行なっている。第一に、民話の地域に赴きフィールドワークを行なっているか、第二に、そのために必要な文献や資料などを精査しているのか、第三に、そのようにして得た材料を十分に分析・考察した結果を、自分の言葉でまとめているのかどうかということである。

■団体の部

最優秀賞・折口信夫賞

「日本の心、地域の文化を伝えるために」

群馬・利根沼田学校組合立利根商業高等学校
パソコン部

この作品は民話の研究ではなく、民話を外国人にいか楽しんでもらうかという動機から発想している。日本を訪れる外国人観光客に、日本の地域文化をよく知ってもらうために、群馬県のみなかみ町の民話を英語訳したものを小冊子、および電子ブックにして提供することを計画したものである。そのために、みなかみ町の観光商工課や民話研究家、英語の指導者などの指導を受けながら九編のミニ絵本を作成し、観光客に提供し、その評価を受けるまでの活動をまとめたものである。

現代の社会に積極的にコミットしつつ作品化しようとする、その高い志を大いに評価したい。初めての試みでさまざまな人に会い、意見を聞き模索、体験しながら多くのことを学んだと思う。また、完成した作品を実際に観光客に提供し、反応を確かめ、自身も確かな手ごたえを感じ取ったであろう。ただ、報告書にはミニ絵本の一部しか紹介されていなかったのが、残念であった。

優秀賞

「佐野の舟橋・佐野の渡し伝説」

群馬・高崎商科大学附属高等学校
社会部進学女子2年

本作品は、万葉集で有名な「佐野の舟橋」の歌をめぐる伝承研究である。その橋が架かっていたとされる場所を訪ね、歌の背景となる地名や事蹟などのフィールドワークを行う。続いて、その伝説を記した歴史的

文献や、伝説が記された書物を集めて、その全体像をとらえる。そして伝説がどのようにして形成されたのかについて分析と考察を加えるといった、オーソドックスな伝承研究の方法である。

しかし、今から千年以上前の歌にまつわる伝説を載せる書物が、すべて近代に書かれたもので、この間の資料に乏しいのは、この研究の難しさを暗示しているようだ。簡単にあきらめずに、これをスタートに、地道に研究を進めていくべきであろう。

優秀賞

「下小鳥町の首塚伝承」

群馬・高崎商科大学附属高等学校

文芸部

年貢の作柄を検査する^{けみやく}検見役を殺したとして、村中が殺害されたとする、痛ましい事件の実否を探る研究である。現代の「^{えんざい}冤罪」に関わるような問題でもある。死体を埋めたとされる首塚を訪ねて、それを伝える方に逢って話を聞く。それによると、偶然に生き延びた人がいて、その人により後世に伝えられたとする構図は、信じがたい事実を伝えるテクニックとして広く用いられる。だからといって、この話の事実性について簡単に結論づけることは避けるべきである。

地域の人々にとって深刻で重い歴史の問題であることを、研究に取り上げたのは真実を追究したいという熱意からであろう。伝承研究の立場としては、事実の追究はもちろんながら、伝承を伝える立場の人々の思いや、そうした思いを抱かせる歴史的環境にも注意を向けていきたい。

佳作

「民話「川上へ流れた仁王さま」の世界」

岐阜県立益田清風高等学校

地域研究

戦乱に焼け焦がれた仁王が、上流へと流れるといった奇跡の伝承である。この伝承を追って、関係する要所を訪れ、事蹟の確認と聞き書きを実施する。そこで得た資料や実体験をもとにレポートはまとめられている。その方法はゆるぎないし、伴なう成果も見られる。第四章の「力持ち子太郎まつりの調査」について、祭りの概況の記事はそれとしても、祭りを見た調査者の感想だけで終わったのは少々物足りない。祭りを行う人々の、この祭りや、力持ち小太郎に寄せる心意などにも言及すべきであった。十九名の共同研究であるので、全員の活発な議論にもとづく研究の成果が十分に反映されているのかどうか、作品の評価にも関係し

た。

■個人の部

最優秀賞

「川との死闘～与三と人柱観音像にこめられた思い～」

愛知県立杏和高等学校

坂東 壮一郎

「^{おこし}起 東の中島 西に人のとほさぬ 火が見える」と唄われる人柱になった、与三（与三兵衛とも）の鎮魂にまつわる伝説である。何度も決壊する堤の難工事を完成させるために一命を賭したという「人柱伝説」である。歌や演劇の脚本にもなるこの伝説を追いかけて、関係するさまざまな書物や記録、散らしに至る類まで丹念に収集し、また、多くの関係者に取材し、新たな資料の発掘や意見を求めるなど、精力的で意欲的な研究である。

かつて流れていた小信川の、川筋を丹念に探しながら歩いて作った地図や写真はもちろんであるが、巻末に載せた多くの資料も貴重な成果である。研究者の地域に対する深い愛着と思いが、使命感にまで高まってまとめさせた労作である。

優秀賞

「東京・町田市における妖怪伝説」

東京・和光高等学校

木原 愛理

町田市の妖怪伝承を複眼的な方法からとらえようとした意欲的な研究である。基本資料として取り上げた（資料①）の「妖怪伝説」を、全国的なもの、一部共通するもの、町田市特有なものに分類し、その要点をおさえたコメントは、深い学識に伴うもので、研究が高い水準であることを示しているといえよう。この成果を、町田市の独自性を明らかにするためだけではなく、日本の妖怪伝承の研究へと発展させるように進めて欲しい。

キツネとタヌキの生息地の違いを自然環境の差や、あるいは大蛇伝説を水脈の問題としてとらえるなど、優れた分析、考察といえる。研究のために多くの方に取材し、またその意見に謙虚に耳を傾けた成果である。こうした研究の基盤ともいえる町田市の豊かな自然環境が背景にあるのであろう。今後、この自然をどのように保存していくのか、将来へも目を向けていきたい。

優秀賞

「チンチン山考」

愛知県立時習館高等学校

仲川 晴斐

この作品は戦国武将マニアの労作である。偶然出会った「チンチン山」と呼称される供養碑の正体を検証するために、資料や系図、聞き取りを行いながら究明しようとした成果である。戦国時代という特殊な時代の出来事を、平易に一般化して説明しようとするところに、執筆の苦勞と妙味がある。結果よりも途中経過の考察に読みがいがあり、その豊富な歴史知識がおもしろい。

佳作

「豊川市の昔話」

愛知県立豊丘高等学校

鈴木 彩水

居住地の昔話を丁寧に取り上げ、話の背景にある稲荷信仰や豊川稲荷、そして祭神である荼枳尼天だきにてんのルーツをたどりながら紹介する。続いて、全国の狐の呼称および特質を上げ、人々の暮らしと狐が深く結びつい

ていることを示す。昔話を通して地域を新たに発見するという趣旨は、このコンクールに叶うものである。ただ、この昔話の分析すなわち和尚と狐との関係など、他の類話との比較へと、さらに関心を広げていきたい。

佳作

「愛知県弥富市「おみよしの松」」

愛知県立杏和高等学校

蓑島 千東

松が伐られる前に願いに来るという「木霊こだま舞入り」の伝説が、ここでは「おみよしの松」の話として、神の化身ともされる津島神社と関わりを持って伝承されている。伝説の由来には複数あり、津島神社以外にも、地域の開発の歴史と結びつくものもある。また、地域の中学校の松と縁ゆかりを持ちながら、現在にまで伝承の根を張っていることを明らかにしてくれた。フィールドワークの成果が十分に示されている。地域を自分の足で歩きながら伝説を確認することは、見えない歴史の発見でもある。伝説の現場に出かけて撮った写真も効果的で、津島神社の華やかな祭礼の写真に勝るとも劣らない価値がある。